

はじめに

橋本 富太郎

この度、公益財団法人モラロジー道德教育財団・道德科学研究所（略称、道科研）所功客員教授（以下、所先生と記す）の傘寿を記念し、また在任十年をもってその職を一区切りとすることになり、同研究所では今回の特集が組まれることになった。

構成は、次の通りである。

- ・所 功「モラロジー研究所（旧称）に奉職十年の歩み」
- ・橋本富太郎・久禮旦雄「所功教授収集・寄贈の皇室関係資料解説」

・久禮旦雄「補説 所功教授編纂絵図・史資料集成の解説」
所先生の当財団における業績の詳しくは本篇に譲るとして、ここでは先生の就任の経緯や成果の背景について述べることにする。平安時代の儀式書を専門とし、広く皇室の制度・文化に

通じる所先生が、いかにしてモラロジー（道德科学）と出会い、ここまで縁を深められたのか、ご本人からお聞きしたことや私自身が見聞したことなどをもとに整理しておきたい。

所先生が最初にモラロジーを耳にしたのは、名古屋大学大学院を修了後に奉職した皇學館大学在職中のことで、その提唱者・廣池千九郎博士についてだった。

当時の皇學館大学は高原美忠学長の時代であり、高原学長は、自身が学生であった神宮皇學館の様子を若手教員たちによく語っていたという。そこに何度か登場したのが恩師の廣池千九郎教授だった。高原青年にとって神宮皇學館にいたころの廣池博士は非常に印象深かったらしく、その人となり語る学長の様子こそ先生の記憶にも鮮明に残ることとなる。

しかし、このときは話に聞くのみでそれ以上のことはなかつ

た。実際の縁として動き始めるのは、その後所先生が皇學館大学から文部省教科書調査官へと職を転じ、そこで美和信夫調査官（名大卒・東大院修了）に出会ってからである。美和調査官はモラロジー研究所（現、財団。以下同じ）の出身であり、廣池博士の皇室論を継いで「天皇研究」を生涯のテーマとしていた。

二人は自然に意気投合し、将来皇室に関する総合的な事典を作ろうと語り合う仲だったという。この構想は後年、『皇室事典』（角川学芸出版社、平成二十一年）として実を結ぶことになる。美和教授（麗澤大学・モラロジー研究所）はすでに逝去されていたが、所先生はこの縁もあって私を編集委員に呼んでくださった。先生は、平成十八年十月六日の第一回編集委員会の代表挨拶において、開口一声「この編纂事業は、モラロジー研究所の創立者廣池千九郎に始まります」と述べられ、末席で聞いていた私は驚きつつも、廣池博士の遺志を継ぐ美和教授との構想を今こそ実現しようと思えるお姿に感銘を受けたことをよく覚えている。

時期が前後するが、私は平成十七年から京都産業大学での研究会に参加させていただけるようになり、それ以来弟子として多くのご指導を賜ることになった。しかし先生のご期待にほとんど応えることができず今も恐縮するしかない。そんな中でも、よく仰せつかったのがモラロジー研究所との間の伝令

のような仕事であり、両者の関係がより密接となる機会に立ち会えたのは幸いなことだった。

このころモラロジー研究所では、平成二十一年にモラルサイエンス国際会議の開催を予定しており、テーマは「廣池千九郎の思想と業績」であった。当時の同研究所道徳科学研究センターの岩佐信道センター長は、その構想を練るにあたり、廣池博士の国家伝統論を通して、海外の研究者に日本皇室のことをよく知ってほしいという考えを持っていた。教育学者の岩佐センター長はハーバード大学で博士号を取られた国際的な碩学であり、日本道徳教育学会の理事等を務める一方で、日本の皇室を大切に思う伝統尊重の意識もきわめて高かった。このような岩佐センター長のもとで会議が開かれた意味は大きかったと思われる。廣池博士の皇室論というテーマを担い得る日本の研究者は所先生をおいてほかに無いと判断すると、国際会議への出席を丁重に依頼され、所先生もそれに応じて精力的に準備し、「廣池千九郎博士の『万世一系』最高道徳論の再検討」と題して発表されるに至った。

私は両先生の間を歩き来するだけだったが、所先生がこの機会に廣池博士の道徳を基調とした皇室論の全容を検討し、現代的意味を見出されたのを拝察できたのは貴重な経験だった。

そして、平成二十三年度末に所先生が京都産業大学の定年を迎えるにあたり、研究所へお迎えしたい旨を廣池理事長に呈し

たのも岩佐センター長だった。このときセンター長が所先生に示した研究課題は二点あり、一つは皇室研究の継続・発展で、もう一つは廣池博士の学界への位置づけというものである。

所先生は研究所におけるこの二つのテーマに誠心誠意取り組みました。その主な成果は本特集に記載されているのでそちらをご覧いただくとして、ここでは、こうしたご尽力の背景にあるものの一端を述べておきたい。

所先生は、廣池博士の業績を高く評価するとともに人間的に大変尊敬されていて、その創立になるモラロジー研究所に対して大きな期待を抱いておられた。一方、廣池博士がその業績に比して学界における研究が不十分であり、評価も不当であることを懸念されていた。このことは、かつて先生と同じ法制史学界関係者の間でも課題となっており、とりわけ内田智雄先生が『先学のあしあと』などに記されていることと軌を一にしている。所先生の思いはそれをさらに強くしたものであった。

所先生は、このような課題に向き合うにしても先人のあり様を敷衍し、同時に後進の育成にも努めつつ研究ネットワークの拡充を企図してこられた。廣池千九郎研究については、評伝の刊行が効果的と見られたが、それを敢えて自身ではなく若手研究者に担わせるところに教育的配慮があった。拙著『ミネルヴァ日本評伝選 廣池千九郎』（平成二十八年）の刊行も全面的にそのようなご意思によるものだが、私の力及ばず内容は不十分

であり、先生はさらに次の機会を期待しておられる。現在京都産業大学准教授の久禮且雄氏も所先生に導かれつつ研究所に職を得て、厳しく鍛えられた一人である。

また先生が研究所こそは、皇室研究の拠点たるべきであり、それはまさしく創立者の遺志だとするのは、長年の廣池博士研究から明らかにされたものであり、財団の教育目的とも根本的に一致する点である。道科研内の「皇室関係資料文庫」開設も、そこへ後述する資料を寄贈されたのもこうした期待によるものである。現職および将来の研究者は現状に甘んじることなく、絶えず創立者の遺志に立ち返り当該テーマに関する研究と教育を担っていかねばなるまい。

本特集がその一助となり、さらに多くの研究者の関心が高まることを願うばかりである。そして所先生にはこれまでのご尽力に深く感謝申し上げますとともに、ますますお元気で、なお一層のご指導を賜れますようさらなるご健勝を祈念いたします。

